令和３年度

Ｎｏ２　５月 24 日

松 籟

発行者

穴水秀人

質問には意図がある

先日（５月１７日）、令和３年度第１回生徒総会が開催されました。約１時間半くらいの話し合いでしたが、たくさんの質問や意見が出される中、今年度の方針や取り組み内容が承認され、本格的に生徒会活動が始動する運びとなりました。話し合いの総括として、私の方で講評をさせていただきました。昨年に引き続いて、会話の成り立ち、特に「質問の在り方」について話をしました。以下にその１コマを紹介します。

本部からの提案：１人１台パソコンを活用し、匿名で皆さんの個人的な悩みを募集したり、アンケートをとったりすることも考えています。

提案への質問　：「個人的な悩み」とはどういうものですか？

このやりとりを引用して・・・ ⇩

私からの講評　：この質問をどうしてしたのですか？本部の回答にどのようなことを期待したのですか？・・・私の予想ですが、この質問の裏には、「個人的な悩みを際限なく募集していたらきりがなくまとまりに欠けてしまう。だから、悩みの内容にはある程度制限し、学校全体に関わるもののみとした方が良いのでは？」という考えがあったのではないですか？であれば、その意図は本部に伝わっていません。

私が生徒に伝えたかったことは、「質問には意図がある。」ということです。では、なぜ質問をするのでしょうか。それは、質問を通じて答えを知りたいからです。つまり、質問をする時点で、何らかの知りたいことがあるということです。例えば、女性に誕生日を聞くということは、もしかしたらその女性に好意があり、プレゼントをしたいという男性の意図が隠れているかもしれないということです。答えを知るためには、その質問の意図を相手に伝えることができるようにしなければいけません。でないと、この女性が男性の人間性を疑う危険性が出てきます。

視点を変えて、質問される側から考えると、意図にあった回答をする必要があるので、もし理解できなければ、逆に意図を問う質問を投げかけることも大切だと思います。会話はキャッチボールだとよく例えられますが、質問の意図にあった回答をすることは、的にボールを当てることと同じです。的を外した回答をすると、いわゆる「的外れな回答」になってしまいます。

私たち人間は、コミュニケーションを通して自分を知ってもらうことと同時に相手のことを理解しようとします。効果的なコミュニケーションの取り方をいろいろな場面を通して経験し、より良い人間関係を築き深めてけたらいいですね。